

10 第二次世界大戦以前における日本の

精神医療の評判

橋本 明

わが国の精神保健福祉行政はとりわけ「外圧」には弱い、とされている。昨今の精神保健福祉法にいたるまでの第二次世界大戦後の法律改正劇を一瞥しても、海外からの批判や提言が重大な役割を果たしていたことがわかる。一方、国内での批判も強く、精神医療そのものもがつであらうネガティブなイメージとあいまって、日本の精神医療の現状は悲観的に捉えられることが多い。ところが戦前のわが国の精神医療は、批判もあるものの逆に称賛も含めて様々な論点から語られていた。もちろん、外国人による短期滞在中の施設見学には自ずと限界があり、的外れの発言もあるかもしれない。しかし、ここでは国内外の論者の記述をそのまま受けとめ、その内容を整理し検討を加えたい。

ごく初期に海外で日本の精神医療を紹介したものとしまして、一八八二年のフォン・デン・シュタイネンによるベルリンでの学会発表がある。彼は一年半に及ぶ世界旅行で立ち寄ったアジアとオセアニアの精神病院を報告した。日本にはあまり精神医学的に興味深いものはないと前置きし、京都癲狂院についてののみ言及している。この病院でヨーロッパ様式とアジア的雰囲気との混在を感じ取ったようだが、それ以上の記載はない。フォン・デン・シュタイネンが「精神病発生に対する文明化の影響」に言及するほど極東は未知の世界であり、その輪郭は不明瞭にしか捉えられていない。逆に、この時期には日本から海外への情報の発信がいくつみられる。一八八五年のベルリンでの神倅の学会発表、一八九〇年の高松彝による『ペンシルバニア癲狂院長閣下ニ送ル答辯書』などである。もともと日本の精神医療は文字どおり黎明期であり、以上の著述からわかることは評価すべき対象そのものがまだ明確な形を持っていないことである。

二十世紀にはいつてからは、一九〇三年に呉秀三が江

戸時代までの歴史をドイツ語で紹介しているが、外国人の発表としてはスチーダが一九〇六年に日本の精神医療の現状を紹介した論文が最初のもと考えられる。京都と東京の精神病院で満床ではない静謐な病棟を見学して、差し迫った入院ニーズはないようだとの印象を得たが、呉からそれは「(患者の)多くが秘密に伏されている」からだ」と説明を受ける。一方、施設の建築様式や内装に興味を示し、それに詳しい記述をさしている。一九一二年のピーターソンや一九二二年のフルノイの記述にもあるように、外国人の和風様式への関心は、当然ながら構造物そのものにとどまらず、そこで展開されている生活ぶりやシステムにも及んでいる。このような「エキゾティズム」を、日本側も巧みに利用している。たとえば今村新吉らは一九〇七年のアムステルダムでの国際会議で京都・岩倉村を紹介してその歴史と伝統を強調し、一九一一年にドレスデンで開催された第一回万国衛生博覧会では、日本政府は近代的な精神医療を紹介しつつ、伝統を意識した展示によって多くの観客の注目を集めたという。

一九三〇年代以降は、ワシントンにおける第一回国際精神衛生会議のドイツ代表であったワイガントとブーフエの親的な記述が目を引く。一九三三年の論文で「わが国(ドイツ)のように精神病患者に対する拒否的な態度は日本では顕著ではない」と述べるワイガントは、日本では多くの患者が自宅で療養を受け、それは「家族の絆(Familiensinn)」のおかげであると高く評価している。興味深いことは、この頃、日本の国内にも家族の美風を語る者たちがいたことである。たとえば、高野六郎(一九三四年)、青木延春(一九三七年)、佐々木恒一(一九三八年)たちは、「日本の家族主義の美風」「わが国古来の家族制度の美点」「我国特有の美風」という言い回しで、私宅監置のある面をポジティブに捉えようとしている。そしてこうした伝統回帰あるいは現状追認は、戦後に批判されることとなるのである。

(愛知県立大学)